



石川酒造株式会社 代表取締役蔵元

石川彌八郎

東京都福生市の石川酒造18代当主、石川彌八郎氏はブルース・ハーモニカを愛好し、蔵の見学や料理やお酒を楽しむお客様を自らも演奏する音楽でもてなしている。まったくの素人だったが、プロの指導で技術を習得。腕が磨かれるにつれて自分の音を聴かせたくなり、どんな曲でもステージの前に出て派手なパフォーマンスで吹くようになっていった。が、ある時、バンド仲間のドラマーがこう言っていた「さめたという。オーディエンスを乗せるのはボーカリストで、そのボーカリストを乗せるのがバックの仕事。いくら上手であろうと、大切なのはメリハリなんだ。前に出る時は前に出る。そして引込む時は今、誰にスポットライトが当たっているかをチェックして、彼らが引き立つように演奏しないと」。知らず知らずのうちに、自分勝手に「自分自分」となっていたことを自省した。以来、その言葉は心にしっかりと残り、石川氏の経営の心構えになっている。

時代の変化を乗り越え、 「酒飲みのテーマパーク」で 新しい風と客を呼び込む

東京都福生市に醸造所を構える石川酒造株式会社。約4000坪の敷地には明治時代に建てられた白壁の蔵が並び、地域に根ざした酒造りを続けている。日本酒の消費が陰りを見せていた1998年には敷地全体を「酒飲みのテーマパーク」とするべく、クラフトビール工房、レストラン、売店を開いた。今では遠方から幅広い年代の客を集める。山あり谷ありの時代を乗り越え、日本酒に頼らない会社へと成長させた18代当主・石川彌八郎氏に、会社の過去と現在、将来への思いを聞いた。

江戸初期から庄屋を務めた 18代続く多摩・福生の旧家

伊藤 御社は日本酒「多満自慢」の蔵元として広く知られていますが、今やブームにもなっているクラフトビールの製造にも早くから取り組まれています。石川彌八郎社長は石川酒造の18代当主でいらっしゃいますが、まずは御社の歴史から伺えますでしょうか。

以前はいつ先祖が酒造りを始めたのか、はっきりしたことが分かっていませんでした。ただ石川の家は細かく記録を残す家系でしたので、蔵に古文書を書き留めていたんですね。ある時それを先代当主である父が大学の先生にお願いして紐解いていただきました。それで幕末の文久3年（1863年）、13代当主が酒造りを始めたことが分かりました。ですから今年が創業160年に当たりますが、逆に言えば石川家の18分の12の歴史は蔵元ではなかった。そうなる、その前は何だったのかという話になりますね。しかしおよそ300年前、元禄ぐらいからの記録は結構しっかりと残っ

ているのですが、それより前はまったく残っていません。意図的に焼き捨てたかのようにさっぱりない。江戸時代以前の古文書はないので証拠がない。

ただ多摩の旧家は、どこも16代とか17代、18代で、スタートが一緒ということなんです。さかのぼると、戦国末か江戸初期ですね。かつて関東の武蔵国は大体、北条氏か武田氏の領地でした。ところが戦国時代でガラガラポンになり、両方とも滅亡してしまいました。そこで北条と武田についていた武将や家臣たちは、追われる立場になったわけです。ここからはあくまで私の想像ですが、